

芸術文化観光専門職大学を目指すもの



平田オリザさん(芸術文化観光専門職大学学長)

地元の子もたちが憧れる大学に

エンターテインメントという要素としては、演劇も観光業も人を楽しませる、人に安らぎを与えることが基なので親和性は高いです。これを一緒に学べる大学を造ることが初めの発想でした。地元の子どもが行ける大学を造ってほしいという声もありましたが、地元の子どもが憧れる大学を造らないと残ってくれません。日本中の演劇部の子もたちが一番行きたい大学を造ることを目指しましたが、その点は成功していると思っています。まちづくりに関しては、アジアの中間層や富裕層などが「豊岡に行ってきたよ」「こういう体験をしてきたよ」と語ってくれるようなまちになっていくことができればよいと思います。そのサイクルの中核に本大学があればと思います。



わたしが考える豊岡のまちづくり



高宮浩之さん(豊岡ツーリズム協議会長)

地域の魅力を形作り世界が注目するまちに

自分たちでは、城崎は1泊してカニを食べるところだと勝手に思っていたところがありました。海外のお客さんからはそうではないと教えてもらいました。カニシーズン以外でも1週間滞在して、温泉や街並み、海や山を楽しんでおられます。我々が今の自分の地域の魅力をもう一度考えながら、みんなで形作っていけば、世界から注目される、十分滞在して楽しんでいただける地域になると思います。



左2番目からから粒来さん、田口さん、川原さん、高宮さん



田口幹也さん(豊岡演劇祭2022プロデューサー)

豊岡での生活に憧れ、体験しに来るまちに

観光とは1泊2日で風光明媚な場所に行って、温泉に入って、現地の名物を食べ、お土産を買って帰るというものでしたが、そのようなイメージはこれから変わっていくと思います。そのまちの生活や佇まい、そこに根付いている土着的な文化があって、それを共有していく、そういう人たちが増えていく。豊岡での生活に憧れて、それを体験しに来る。それが豊岡の目指す文化観光だと思います。



川原周子さん(そば庄女将)

子どもが帰ってきたくと思うまちに

子どもたちが大学進学をきっかけに豊岡から出ていきますが、出ることも必要だと思います。出ないと地域の魅力もわかりません。一度出た子どもたちが帰ってきたくするようなまちにしたいと思っています。子どもたちが帰ってきたいと思うまちにすることは、観光に来てくれる人たちも行きたいと思うようなまちになることです。



粒来楓彩さん(芸術文化観光専門職大学2年生)

若い人が愛着以外の愛情を持てるまちに

豊岡は、若い人が愛着以外の愛情を持てるまちになってほしいと思います。私は自分が育って、母のように見守ってくれた八戸市にももちろん愛着はあります。昔からそこにいたから、育ったからではなく「この地域にこうした魅力があるからこの地域を愛している」と思えるようなまち。豊岡は、それになれるだけのポテンシャル(潜在能力)があると思います。



司会進行を務めた佐々木恭子さん
(フジテレビアナウンサー)からのコメント

ご縁をいただいて私の祖父母が住んでいた豊岡へ30年ぶりにお邪魔しました。改めてすてきなところだと感じました。現状維持ではなく変わろうとしているところに感動しました。また、保護されている鳥という印象だったコウノトリが、サギと一緒に普通に飛んでいる光景にも感動しました。

※本紙に掲載している情報は編集時点(10月14日)のもので、変更になっている場合がありますので、注意してください。



豊岡ファンミーティング 2022 トークセッション

市民が豊岡ファンに豊岡の魅力・未来を語りかけた

9月19・20日、企業やメディア関係者などを本市に招き「豊岡の今」を伝えるため豊岡ファンミーティングを開催しました。20日には、出石永楽館で「トークセッション」を行い、さまざまな分野で活躍されている市民の方に壇上で語り合っていたいただき、豊岡に訪れた皆さんに豊岡の魅力や未来の展望などを伝えていただきました。《問合せ》大交流課 ☎21-9016

わたしの豊岡の思い出



河合美智子さん(女優)

豊岡の人はよい距離感で見守ってくれ奥ゆかしい

2015年、出石永楽館でイベントがあり市内に2泊3日滞在しました。但馬空港に降りた時「ただいま」という懐かしい気持ちになりました。また、会う人みんなとても優しく、しかもよい距離感で見守ってくれ奥ゆかしさがありました。それで私はここに住むと幸せになると思い4年前に移住しました。豊岡には自分というものをしっかり持った人が多く、おもしろい話をいっぱい聞けます。海、山、川、温泉なんでもあります。ただ、食べ物がおいしすぎて順調に体重が増え困っています。



左から佐々木恭子さん、河合さん、西上副市長

なぜ移住・Uターン? 豊岡での挑戦



ひうらさとるさん(漫画家)

気持ちをリセットして楽しめる豊岡を発信

東日本大震災が発生し、東京から1歳の子どもを連れて夫の故郷である豊岡へしばらく帰省しました。すると、水や空気がおいしく、ざわざわしていた気持ちが落ち着き、このまちが良いなと思い、移住しました。以前は東京から豊岡までの移動時間がとても長く感じました。しかし、最近はこの長い移動時間がとても楽しみです。また、豊岡は気持ちを1回リセットして楽しめるまちなので、その魅力を発信していきたいです。



左2番目から河合さん、田淵さん、ひうらさん、下村さん



下村浩平さん(靴店「Maison Def」オーナー)

100年後にも靴産業が残れるように

リーマンショックの影響があった大学卒業時、友達から渡された本にかばんストリートや伝説の靴職人である植村美千男さんなどが特集されていました。靴が好きだった私はやりたいことをするなら「今だ」と豊岡に移住しました。私は、豊岡を100年後でも靴産業が残っていける場所にしたいと思っています。スイスには200年の時計の歴史があり、最初の100年で工業製品として自立し、次の100年でラグジュアリー化(贅沢・豪華さ)を目指しました。豊岡でもこれを参考にしたいと思っています。



田淵伸司さん(パラリンピアン)

遊びどころ満載の豊岡を遊びつくしたい

移住した理由は、神鍋高原にスノーボードをするための最高のゲレンデがあったからです。また、地元の播州弁と違い、豊岡の優しい方言に心が落ち着かされ、このまちから離れられなくなりました。豊岡の魅力は海や山や川があり、遊ぶところが多いこと。だから、遊びつくして、それを情報発信していきたいと思っています。